

# ドメスティックな女性たちの政治力

ー ハリエット・ビーチャー・ストーリーの『アンクル・トムの小屋』を中心に ー

野口 啓子

## I

南北戦争が行き詰まりをみせていた1862年晩秋、大統領官邸を訪れたハリエット・ビーチャー・ストーリーを、エイブラハム・リンカーンが“*So you're the little woman that made this big war*”と言って出迎えたというエピソードは、あまりに有名であるが、<sup>1</sup> その真偽のほどはともかく、この言辭はストーリーの『アンクル・トムの小屋』(1852)が持ちえた政治力をもっともよく伝えている。発売と同時に全米に大きな反響を呼びおこした本書は、1年以内に30万部、翌年には100万部を売り上げ、19世紀最大のベストセラーとなった。<sup>2</sup> その影響力について、奴隸制廃止論者ホーレス・グリーリーの伝記作家は後にこの時代を振り返り「1850年代の共和党支持は『アンクル・トム』がもたらしたのだ」と語り(ゴセット183)、本書と第16代大統領誕生との関わりを示唆している。一方で、南部の奴隸制擁護論者ルーファス・コートは、発売後間もなく、この本が「200万人の奴隸制廃止論者(abolitionists)を生み出すであろう」と恐れに満ちた予言的言葉を残している(183)。

かほどに政治的影響力を有した『アンクル・トム』であるが、実は、そこにはストーリーの危険な挑戦があった。当時、文学の題材としては最も人気のなかった「奴隸制」を正面からとりあげ、かつ、女性が政治について公に語る事がタブー視されていたヴィクトリア朝アメリカにおいて、国家最大の政治問題について熱弁をふるったのである。<sup>3</sup> ストーはいかにしてこれら二つの障壁を乗り越え、アメリカ政治を揺るがすほどの力を持ちえたであろうか。彼女は家庭を女性の領域とした当時の考え方を大きく逸脱して、女性に政治

参加を呼びかけたわけでは決してなかった。むしろ、女性と家庭性を結びつけたイデオロギーに準拠する形で奴隷制の不当性を訴えたのである。本稿ではドメスティックな三人の女性登場人物に焦点をあて、『アンクル・トム』における政治の家庭化/家庭の政治化という局面から、ストーがどのようにドメスティックな女性の政治力を描いているか考察してみたい。

## II

『女性の小説』を著したニーナ・ベイムは、ストーほど才能のある作家が、1850年代に人気を博した女性の成長物語（いわゆる「ドメスティック・ノヴェル」）を書かなかったことを指摘したうえで、<sup>4</sup>『アンクル・トム』にはそれに代わる「女性キャラクターの群像」があり、それにより、当時の女性のあるべき姿が窺われることを示唆している（16）。その群像の中で、本稿のテーマにとって重要な位置を占めるのが、ケンタッキーの奴隷主の妻エミリー・シェルビー、（1850年の）逃亡奴隷法を通した上院議員の妻メアリー・バード、地下鉄道の拠点でもあるクエーカー・セツルメントのレイチェル・ハリデーである。これら三人の女性は、いずれも、19世紀白人中産階級を代表する女性であり、ヴィクトリア朝アメリカの「真の女性」<sup>5</sup>を体現するドメスティックな女性でありながら、その家庭性を内部から覆して、社会を揺るがす政治力を秘めている。1851年3月、ストーは週刊新聞 *National Era* 上に『アンクル・トム』の連載を始めるにあたり、その編集長ガメイリアル・ベイリーに「女・子どもも物申すときがきた」と高揚した調子で書き送っている（ヘドリック、『ストー・リーダー』66）。つまり、家庭の領域の住人である女性たちも——そしてその保護のもとにある子どもたちですらも——公の政治に参画すべきときがきたと宣言しているのである。女・子どもとは、参政権をもたない、つまり、政治権力から除外された者たちのことであるが、そういった私的領域の住人たる「政治的弱者」も、こと奴隷制問題については、おおいに発言すべきときがきたと主張しているのだ。従って、上にあげた三人のドメスティックな女性たちは、いかにすれば女性も奴隷制をめぐる議論に加わり、影響を及ぼすことができるのかを示す、ストーの代弁者であると言ってもあながち的外れにはならないであろう。

物語冒頭部に登場するシェルビー夫人は、奴隷所有者の妻として、また敬虔なキリスト教徒として、親身に奴隷たちの世話や宗教教育を行っている、いわば温情主義的なミスレスとして描かれている。しかし、夫が借金返済

のために、長年忠実に仕えてきた奴隷頭のトムと女性奴隷エライザの一人息子を売り払ったという事実を知り、奴隷制という制度内では、どのように親切に、寛大に対処しても、改善には結びつかないという現実直面する。

“This is God’s curse on slavery!—a bitter, bitter, most accursed thing!—a curse to the master and a curse to the slave! I was a fool to think I could make anything good out of such a deadly evil. It is a sin to hold a slave under laws like ours,—I always felt it was—I always thought so when I was a girl,—I thought so still more after I joined the church; but I thought I could gild it over. —I thought, by kindness, and care, and instruction, I could make the condition of mine better than freedom—fool that I was!”

“Why, wife, you are getting to be an abolitionist, quite.” (84; 下線は筆者)

シェルビー夫人は、奴隷制の悪にうすうす気づきながらも、自らの努力で(奴隷たちの生活を)改善できると信じていたが、それが単なる欺瞞でしかなかったことに気づかされる。彼女が認識するにいたるのは、奴隷が置かれた根源的に危うい立場だけではない。女性もまた、経済的には、奴隷のように無力だという厳然たる事実にも向き合うことになる。売られようとしている奴隷を助けようとして、身につけている装飾品を差し出すが、それが何の足しにもならないことは読者にも明白である。一家の主婦の経済的無力さについては、小説の後半で再び繰り返される。深南部へ売られたトムを買い戻すという約束を一向に果たそうとせず、トムの新しい土地での再婚までほのめかす夫に、シェルビー夫人は、自分が音楽教師となって働き、金を稼ぐことを示唆するが、プランテーションのミスストレスとしてそのような身を落とす行為は是認できないと、夫に一蹴されてしまう。

“You wouldn’t degrade yourself that way, Emily? I never could consent to it.”

“Degraded! Would it degrade me as much as to break my faith with the helpless? No, indeed!”

“Well, you are always heroic and transcendental,” said Mr. Shelby, but I think you had better think before you undertake such a piece of Quixotism.” (373)

夫のシェルビーは、自ら働いて金を稼ぐという妻の考えを「ドン・キホーテ的空想」として、取り合おうとしない。これに代ってトムを買い戻す資金

稼ぎの提案するのは、トムの妻クロイで、まだ幼い子どもたちと離れ、遠い菓子屋で住み込みで働くことになる。このエピソードは、当時の女性が置かれていた社会的立場を端的に伝えている。つまり、上層階級の白人女性の労働は「身を落とす行為」とみなされること、妻は夫に反対されれば従うしかないこと、その一方で、それ以外の女性はこれらの規範が適応されないということだ。

しかしストーリーはシェルビー夫人をただ無力で従順なだけの女性としては描いていない。トムが奴隷商人に引き渡される当日、気まずい場面を避けようとして外出する夫に対し、彼女はあえて苦しむ人々の所 (slave quarters) を訪れ、同情の涙を流すのである。この「涙」こそ、感傷小説のなかで重要な役割を果たす文学装置であるが、ストーリーは次のように描写している。

“Tom,” she said, “I come to—” and stopping suddenly, and regarding the silent group, she sat down in the chair, and, covering her face with her handkerchief, began to sob.

“Lor, now, Missis, don’t—don’t!” said Aunt Chloe, bursting out in her turn; and for a few moments they all wept in company. And in those tears they all shed together, the high and the lowly, melted away all the heart-burnings and anger of the oppressed. O, ye who visit the distressed, do ye know that everything your money can buy, given with a cold, averted face, is not worth one honest tear shed in real sympathy? (167; 下線は筆者)

身をくらまして自ら犯した不当な行為の結果を見ないことで、その場をやり過ごそうとするシェルビー氏と、抑圧された人びとに寄り添い、共感の涙を流すシェルビー夫人とを対照的に描くことで、ストーリーは女性の「感傷力」を強調しようとする。それは、「冷淡にそっけなく金で買い与えたものは、どんなものであれ、心から同情して流された涙一滴の値打ちもない」ということだ。『アンクル・トム』は、実は、この信念に貫かれていると言っても過言ではない。このことは、エヴァが、正当な理由もなく鞭打たれた可愛そうな少年ドドにかけた優しい一言が、ご主人ヘンリックから投げ与えられた小銭よりもドドの心を打つ場面を思い出せば十分であろう。

ストーリーはさらに「女に経済は分らない」という、女性を経済活動から排除する、あるいは、男性の経済活動への干渉を封じる、当時の父権的言説をくつがえすかのように、夫亡きあとのシェルビー夫人による農場経営の成功

をさりげなく描き込んでいる。

Mrs. Shelby, with characteristic energy, applied herself to the work of straightening the entangled web of affairs; and she and George were for some time occupied with collecting and examining accounts, selling property and settling debts; for Mrs. Shelby was determined that everything should be brought into tangible and recognizable shape. . . . (587)

夫が何年かけてもできなかった複雑化した放漫経営の是正と借金の清算を、シェルビー夫人が息子のジョージとともに、管理可能な規模に縮小することで果たせたことが示唆されている。この後息子が、その最終段階である奴隷の解放を行うにいたるのだが、奴隷解放後の農場経営を成り立たせるように整えたのはシェルビー夫人であったといえるだろう。(ここで、トマス・ジェファソンが奴隷制には反対しながらも、その広大なプランテーション経営ゆえに、最後まで奴隷を解放することができなかったという事実を思い起こしてもよいであろう。<sup>6)</sup>

### Ⅲ

シェルビー夫人の感傷の力は、メアリー・バードと政治家の夫とのやりとりにおいて、より具体的で実行力のあるものとなる。キリスト教的慈愛をもって家庭を管理するバード夫人は、普段は公的な政治には決して口出しをしない「慎ましやかな女性」として登場するが、逃亡奴隷を助けることを違法とした「新しい逃亡奴隷法」については、非人間的な恥ずべき法であると激しく非難する。命からがら逃げてきた哀れな奴隷を追い返すような法は、キリスト教精神に反するからである。この逃亡奴隷法を議会で通過させてきたばかりのバード氏が、公共の利益が含まれる政治問題は理性的に捉えるべきで、個人的な感情に流されてはいけないと妻をたしなめるのに対し、バード夫人は「虐げられし人々を助けよ」と命ずる聖書の教えに反するような法には決して従わないと宣言する。

ここには、政治的妥協の産物である逃亡奴隷法という世俗の法と聖書に基づく神の法とが対峙されている。ストーリーは後者に軍配をあげることで、「公共の利益」という名のもとに非人道的な法律を制定してしまう男性主導の政治を批判すると同時に、キリスト教に依拠した女性の「個人的感情」を政治

化し、自身の信念に沿わない法は、たとえ国家の法であっても従わなくてよいと、ヘンリー・デイヴィッド・ソローのように「市民の不服従」(“Civil Disobedience”)を説いている。<sup>7</sup>

この議論の後、現実の逃亡奴隷エライザが家の戸口に現れたとき、バード氏が自ら通した法を破って彼女の逃亡を助けることになるのは、ストーが用意した実に巧みな戦略といえるであろう。

Our good senator in his native state had not been exceeded by any of his brethren at Washington, in the sort of eloquence which has won for them immortal renown! How sublimely he had sat with his hands in his pockets, and scouted all sentimental weakness of those who would put the welfare of a few miserable fugitives before great state interests!

He was as bold as a lion about it, and “mightily convinced” not only himself, but everybody that heard him;—but then his idea of a fugitive was only an idea of the letters that spell the word,—or at the most, the image of a little newspaper picture of a man with a stick and bundle with “Ran away from the subscriber” under it. The magic of the real presence of distress,—the imploring human eye, the frail, trembling human hand, the despairing appeal of helpless agony,—these he had never tried. He had never thought that a fugitive might be a hapless mother, a defenceless child. . . . (155-56; 下線は筆者)

引用の前半部分では、「偉大なる州の利益」よりも数人の逃亡奴隷の幸福を優先させようとする議員たちの「センチメンタルな弱さ」をあざ笑うバード氏の「崇高なる雄姿」が描かれ、後半部ではそのバード氏の逃亡奴隷のイメージが文字上の抽象的なものでしかなかったこと、あるいは、せいぜい新聞に描かれる、包みを結わえた棒切れを肩に担ぐステレオタイプな男性奴隷の図像<sup>8</sup>でしがなく、必死に助けを求める「訴える目」や「震える手」をした生身の人間ではなかったこと、まして、逃亡奴隷が不運な母親やいたいけのない子どもだとは想像すらしなかったことが暴かれている。男性による政治の抽象議論と生身の奴隷に寄り添う女性の感情とが対比されたうえで、読者にどちらに従うべきか選択を迫るわけである。

ストーは、さらに、夫妻が最近子どもを亡くしたことを明かし、バード氏のなかに眠っている感傷が呼び覚まされる可能性を示唆する。ストーもそうであったが、幼子を亡くすことは、19世紀中葉のアメリカにおいて決して

稀なことではなく(ホックマン 33-34)、彼女はそのような経験をもつ多数の読者に、我が子を必死で守ろうとするエライザへの共感を喚起し、バード氏が自らの雄弁な演説で通した法を、結局は破って逃亡奴隷を助ける行為に理解をとりつけようとする。かくして彼の政治家としての背反行為は、バード夫人から「今回は、あなたの心は頭より立派にはたらいたわね」と賞賛されるが、ストーリーはこれにより、読者にも同じように振る舞うよう促している。「上院議員も一人の人間にすぎぬらしいこと」と題された9章において、ジョン・バードがひどく滑稽化されているのは、そのモデルとされる、逃亡奴隷法に賛成票を投じたニューイングランドの民主党員ダニエル・ウェブスターへの非難が込められているためかもしれない。ストーリーは家庭を政治化して女性の発言力を高め、またバード氏の政治理念を家庭化することで、政治に無関心な北部の読者に奴隷制の問題を分かりやすく提示し、反奴隷制へのセンチメントを喚起したといえるだろう。

#### IV

エライザ親子が送り届けられる次の中継地点、クエーカー教徒のセツルメントに住むレイチェル・ハリデーは、あらゆる意味でストーリーの理想を体現している女性といえる。ここでは、シェルビー夫人やバード夫人の父権的な家族における男性の抽象議論と女性の内発的感情の対立はもはやなく、レイチェルを中心とした母系社会が形成され(トムキンズ 141-44; ドノヴァン 68-69)、すべては家族や共同体の自発的相互扶助によって運営されるからである。二人の家庭夫人に比べ、レイチェルがハリデー夫人 (Mrs. Halliday) と呼ばれたり、夫シメオンがハリデー氏 (Mr. Halliday) と呼ばれることがないのも、このことと関係しているのかもしれない。レイチェルの温かい人間愛に基づく家庭管理のもとでは、頑健なシメオンもその伝統的な家父長制的要素が取り除かれ、周縁に追いやられていることは、ジェイン・トムキンズが指摘するように、次の引用に暗示されている。女性たちが朝食の用意をする調和に満ちた場面の片隅で「ヒゲを剃る」シメオンが小さな点景のように描かれている(145-46)。

While all other preparations were going on, Simeon the elder stood in his shirt-sleeves before a little looking-glass in the corner, engaged in the anti-patriarchal operation of shaving. Everything went on so sociably, so quietly, so

harmoniously, in the great kitchen,—it seemed so pleasant to every one to do just what they were doing, there was such an atmosphere of mutual confidence and good fellowship everywhere,—even the knives and forks had a social clatter as they went on to the table. . . . (223)

『アンクル・トム』においてレイチェルの存在が重要なのは、19世紀の家父長制を超克した範例としてだけではない。それ以上に重要なのは、奴隷制の超克そのものも示唆している点にある。それは奴隷制を悪と認識しながらも奴隷解放にいたらなかったセント・クレアの哲学的問いに答えるものとなっているのである。トムが売られていく第二の主人セント・クレアは、ある意味で、ストーリーの奴隷制に対する深い理解を代弁している。奴隷制の根源に、人間の利己主義に基づく、マルクス主義的な階級支配の構造を見抜いている彼は、次のように従姉妹のオフィーリアに語りかける。<sup>9</sup>

This cursed business, accursed of God and man, what is it? Strip it of all its ornament, run it down to the root and nucleus of the whole, and what is it? Why, because my brother Quashy is ignorant and weak, and I am intelligent and strong,—because I know how, and *can* do it,—therefore, I may steal all he has, keep it, and give him only such and so much as suits my fancy. Whatever is too hard, too dirty, too disagreeable, for me, I may set Quashy to doing. Because I don't like work, Quashy shall work. Because the sun burns me, Quashy shall stay in the sun. Quashy shall earn the money, and I will spend it. Quashy shall lie down in every puddle, that I may walk over dry-shod. Quashy shall do my will, and not his, all the days of his mortal life, and have such chance of getting to heaven, at last, as I find convenient. This I take to be about what slavery is. (331)<sup>10</sup>

南部社会がいかにも奴隷制擁護の言説を打ち立てようと、その根底に決して合理的な説明がつかない人間の利己的な欲望があることを理解しているセント・クレアは、奴隷に暴力を振るって労働を強制することは一切拒絶し、放任主義を取る「寛大なご主人」の役を演じることになる。その当然の帰結として、彼は大きい「無秩序カオス」という現状を受け入れざるを得ない。料理頭ダイナの混乱を極めた台所は、その象徴となっている。この点でレイチェルのピカピカに磨き上げられた清潔なキッチンが、それへのアンチテーゼとみ

なすことができる。<sup>11</sup> セント・クレアを悩ませた「暴力か、さもなくば、混沌か」という二者択一は、レイチェルの家庭において、クエーカー教徒の穏やかな指示により乗り越えられることになる。

“Mary, thee’d better fill the kettle, hadn’t thee?” gently suggested the mother.

Mary took the kettle to the well, and soon reappearing, placed it over the stove, where it was soon purring and steaming, a sort of censer of hospitality and good cheer. . . .

Rachel now took down a snowy moulding-board, and, trying on an apron, proceeded quietly to making up some biscuits, first saying to Mary,—“Mary, hadn’t thee better tell John to get a chicken ready?” and Mary disappeared accordingly. (218; 下線は筆者)

ここでは命令の代わりに、“thee’d better ~, hadn’t thee?” と優しく指示をしてそれぞれの労働を促すスタイルが示唆されている。そして、子どもに手伝わせたり、近所同士の助け合いにより、servant (奴隷) を置かなくても家庭を切り盛りできる形が提示されているのである。

このように、レイチェルの家は「召使」を置かない家庭のモデルとして登場する。近代家政学を創始したストーリーの姉キャサリン・ピーチャーの『家事経済論』(1841)も、ある意味で、servant なくしていかに家庭の運営が可能であるかを示したものとなっているが、その背後には奴隷制なきアメリカを思い描いていることは明らかであろう。そして、この本においても、子どもの労働や近隣同士の助け合いが繰り返し強調される。<sup>12</sup> ストーは後に『家事経済論』の増補版ともいべき『アメリカ女性の家庭』(1869)を姉のキャサリンとの共著で出版するが、ストーリーにおいて家庭の管理が国家の管理のアナロジーとなっていることは、姉のキャサリンの場合と同様、明らかである。ニコール・トンコヴィッチが示唆するように、二人の姉妹にとって、家事の一つ一つが、パンを焼く行為すら、共和国を支える愛国的な行為なのであり (xi)、南北の地域差を超えて共通の家庭的価値観を育むことは、ナショナル・アイデンティティの形成と等価なのである (xxii)。

それゆえ、レイチェルのキッチンが表象する秩序と調和は、いわば、奴隷制なき民主国家アメリカが目指すべき指標であると言っても過言ではない。この家で、エライザが初めて本当の意味で休むことができ、夫ジョージとも合流して初めて「ホーム」といえるものを持ったと感じるのも、それゆえで

あろう。カナダへと出立する朝、エライザの家族はレイチェルの家族と同じテーブルにつく。この場面はキング牧師が「私には夢がある」の中で思い描いた、白人と黒人がいつか対等に同じテーブルにつく日(ラヴィッチ 333)を先取りしていると言えるかもしれない。ただし、この場に居合わせているのは、白人と白人に限りなく近いアフリカ系アメリカ人であることを付け加えておかなければならないが、「元奴隷の息子と元奴隷所有者の息子」(333)というキング牧師の父系的イメージがストーリーにおいては、レイチェルを中心とした母系的イメージとなっていること、異なる人種が向き合うというより、キリスト教的家族愛のなかにあらゆる区別が解消されている点で、より進歩的であると捉えることも可能かもしれない。この場面が「夢」のイメージで満ちているのも(フィッシャー 111-13)、ドメスティックな女性がアメリカの政治を主導した場合の、あるべきアメリカの理想の姿をストーリーが夢見ているためかもしれない。

## V

本稿では『アンクル・トム』に登場する白人中産階級のドメスティックな女性を中心に、その政治力の可能性についてみてきた。なぜなら、ストーリーの関心の中心は、そのような女性読者たちを突き動かすことにあると思われるからである。しかし本書におけるストーリーの女性についての考察は、そのような特定の集団にとどまらないことはいままでもない。幼くしてこの世を去る天使のようなエヴァや、その養育係として南部へやってきたニューイングランド出身の独身女性オフィーリア、その一方で育児放棄とも言えるエヴァの病弱で利己的な母マリーが描かれる。さらに、夫のために労働を自らかってでながら、結局は夫をなくしてしまう黒人の料理人クロイト、彼女と対照的なひとりよがりな頑固な料理人ダイナ、ヴァージニアで家畜のように育てられた孤児奴隷のトプシー、我が子の奴隷としての未来に耐えられず自殺を犯してしまうキャシーなど、黒人女性の群像も多彩である。

だが、こういった人種や階級や地域の差異にもかかわらず、ストーリーが奴隷制という差し迫った社会問題を乗り越えるために提示するのは、つまるところキリスト教を基盤とする白人中産階級の女性の価値観でしかないことも明らかである。今日的視点から見ると、そこにストーリーの限界があるといえるかもしれないが、ドメスティック・イデオロギーが支配的であったヴィクトリア朝アメリカのコンテクストにあっては、それゆえにこそ『アンクル・トム』



- 9 マルクス主義的労働者階級の捉え方については、1840年7月号の *Boston Quarterly Review* において、オレストス・ブラウンソンが「労働者階級」というエッセイを発表した。その中で彼は中産階級がプロレタリアートの分前を奪っていると主張し、それゆえ、奴隷制が廃止されても労働者の隷属状態 (wage slavery) はなくならないと警告している (カーカム 52-53)。ブラウンソンの主張で重要なのは、奴隷制の悪が一部の残酷な奴隷所有者によるものではなく、制度そのものによって引き起こされると主張している点であろう。ストーも『アンクル・トム』において同様の立場を貫いている。カーカムは一方で、セント・クレアとオフィーリアとの間の奴隷制をめぐる議論は、1830年代の父ライマンのレイン・セミナリーでの奴隷制廃止をめぐる激しい論争以来、20年間にわたって積み上げられてきたものが土台となっていると述べている (126)。
- 10 “Quashy” とは南米北東岸のスリナム共和国 (旧オランダ領ギアナ) の言語スリナム語 “Quassi” から派生した語で、黒人奴隷をさす (アモンズ 193 n. 4)。
- 11 ジリアン・ブラウンは台所の秩序がそこを管理するミストレスの政治的主張や道徳的要素と呼応することを示唆している (24-26)。
- 12 ビーチャーもストーも「召使」(servant) を雇うことを否定してはいないが、それは単なる手伝い (helper) としてであって、主たる家事労働者は母と子ども——とりわけ娘——であることが望ましいと考えている。それゆえ、子どもに早くから家事を教えることを強調する (ビーチャー 49-50, 163-64; ビーチャー&ストー 229-32)。また、アメリカの「召使」はヨーロッパの「召使」とは違い、民主主義の平等の原則の影響により、近隣同士の助け合いの要素が強いと述べている (ビーチャー&ストー 235-36)。

### Works Cited

- Ammons, Elizabeth, editor. *Uncle Tom's Cabin: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*. W. Norton, 1994.
- Baym, Nina. *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70*. U of Illinois P, 1993.
- Beecher, Catharine. *A Treatise on Domestic Economy: For the Use of Young Ladies at Home and at School*. 1841. Harper and Brothers, 1856.
- Beecher, Catharine E., and Harriet Beecher Stowe. *The American Woman's Home*. 1869. Rutgers UP, 2002.
- Brown, Gillian. *Domestic Individualism: Imagining Self in Nineteenth-Century America*. U of California P, 1990.
- Donovan, Josephine. *Uncle Tom's Cabin: Evil, Affiliation, and Redemptive Love*. Twayne Publishers, 1991.
- Douglas, Ann. Introduction. *Uncle Tom's Cabin*. Written by Harriet Beecher Stowe, pp. 7-34.
- Fisher, Philip. *Hard Facts: Setting and Form in the American Novel*. Oxford UP, 1987.
- Gossett, Thomas F. *Uncle Tom's Cabin and American Culture*. Southern Methodist UP, 1985.

- Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. Oxford UP, 1994.
- , editor. *The Oxford Harriet Beecher Stowe Reader*. Oxford UP, 1999.
- Hochman, Barbara. *Uncle Tom's Cabin and the Reading Revolution: Race, Literature, Childhood, and Fiction, 1851-1911*. U of Massachusetts P, 2011.
- Noguchi, Keiko. "Harriet Beecher Stowe and Abraham Lincoln: Two Giant Jeremiahs in Mid-Nineteenth-Century America." *The Tsuda Review*, No. 53, 2008, pp. 1-36.
- Kirkham, E. Bruce. *The Building of Uncle Tom's Cabin*. U of Tennessee P, 1977.
- Ravitch, Diane, editor. *The American Reader: Words That Moved a Nation*. Harper-Perennial, 1991.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. Penguin, 1985.
- Sundquist, Eric J., editor. Introduction. *New Essays on Uncle Tom's Cabin*. Cambridge UP, 1993, pp. 1-44.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. Oxford UP, 1985.
- Tonkovitch, Nicole, editor. Introduction. *The American Woman's Home*, written by Catharine E. Beecher and Harriet Beecher Stowe, Rutgers UP, 2002, pp. ix-xxxii.
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly*, vol. 18, 1966, pp. 151-74.
- 明石紀雄『モンティチェロのジェファソン アメリカ建国の父祖の内面史』ミネルヴァ書房 2003.
- 野口啓子『「アンクル・トムの小屋」の政治的感化力とキリスト教』『「アンクル・トムの小屋」を読む 反奴隷制文学の多様性と文化的衝撃』高野フミ編、彩流社、2007、pp. 63-86.